

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

2017年度（前期）指定公募

「訪問看護ステーション等が開設する医療・介護の相談室づくり（3年計画）」

1年目

完了報告書

申請者：杉本 みぎわ

所属機関：福岡県立大学

提出年月日：2018年8月30日

1、毎月の保健室の開催

本事業は、北九州市若松区迫田町に所在する空き家を、家主の方のご厚意により無料でご提供いただき（水光熱費等の実費のみ）、地域の保健室として活動することを目的として始まった。

運営するスタッフは、すべてボランティアであり、それぞれの仕事を持ちながらの運営であるため、それぞれが集まりやすい週末の二日間、毎月第2土曜日、日曜日を開室日とした。

初年度は、地域の方々に活動を広く知っていただくため、毎月の開室日にイベント的要素を必ず取り入れ、チラシの作成もお行い広報活動に力を入れた。

毎月の活動内容は以下のとおりである。（表 1）

（表 1：年間の開室日イベント）

	イベント	参加人数		イベント	参加人数
9/9	こみねこカフェ	5名	3/10	新学期に向けて手作りかばんを作ろう	3名
9/10	身体によい発酵食品、お料理教室	21名	3/11	こみねこカフェ	7名
10/14	保健室の活動報告会	18名	4/7	「人生 BOOK」写真整理	12名
10/15	こみねこカフェ	8名	4/8	「色カルタ」で遊ぼう	11名
11/11	公民館文化祭参加		5/12	こみねこバーベキュー	20名
11/12	公民館文化祭参加		5/13	フェイシャルマッサージ	22名
12/9	手作り教室	28名	6/9	パステル指絵	16名
12/10	クリスマスランチの日	18名	6/10	若松を語ろう！	13名
1/13	今年の抱負を語ろう	13名	7/7	集中豪雨のため中止	
1/14	漢字一文字に思いを込めて	12名	7/8		
2/10	こみねこカフェ	11名	8/11	中国茶はいかが？	12名
2/11	元祖保健室の秋山さんと語ろう！	30名	8/12	熱中症・脱水症を予防しよう	10名

開催日は月に2日間だけであったので、地域の方々が盛んに出入りする状況には至らなかったが、独居高齢者の数名は毎月必ず昼食の時間をめがけて来室されるようになり、

開催日を楽しみにして下さるようになってきた。

また、地域の方で昼食の準備を手伝ってくださるボランティアの方が少しずつ増えてきて、2名の方は毎月必ずお手伝い下さるようになっている。

毎月のイベント等の計画は、月の開室日の後に必ず定例ミーティングを開催し、その回の反省と、次回に向けての計画を立て、チラシ作りにつなげるようにした。

北九州市認知症支援・介護予防センターの登録施設として承認を受け、毎月の定例会は同センターの会議室を利用して行うとともに、北九州市への情報共有も行った。(写真1)

同センターへの登録施設として承認を受けたことにより、行政との連携が図れたこと、また平成29年度の北九州市生き生き長寿プラン(介護保険事業計画及び老人福祉計画)にコラムとして活動内容を掲載されたことは、この活動に対する行政の期待も大きいものとして認知されていると感じている。(写真2)



写真 1

コラム 地域でのつながりづくり (暮らしの保健室 in 若松 (こみねこハウス))

「地域包括ケアシステム」とは、重度な要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、医療・介護・生活支援・介護予防・住まいが一体的に提供される仕組みのことをいいます。「提供される仕組み」というと専門的な制度やサービスを思い浮かべるかもしれませんが、「自分の暮らし」は、公的な制度や専門的なサービスだけで支えられるものではありません。

「病院に行くほどではないけどちょっと気になる」「健康のことで少し不安がある」、そんな日常の小さな困りごとや不安を気軽に相談できる、学校の保健室のような場所が若松区にある「暮らしの保健室 in 若松 (こみねこハウス)」です。ここでは、ボランティアの看護師、保健師、ケアマネジャー、理学療法士などの専門スタッフが、お茶をしながらゆっくり話をきいてくれます。もちろん、相談を受けるスタッフは専門的な知識を持っているので、必要があれば専門機関への橋渡しも行います。

だからといって、「具合が悪いときにだけ行く場所」とも違います。子どもから高齢者まで、地域に住むいろいろな人たちが気軽に立ち寄ってのんびりとおしゃべりしたり、ちょっとしたイベントに参加したりしています。「住みなれた地域で暮らし続ける」ためには、隣近所やいろいろな社会資源と意識的に関わりを持つことが大切です。そんな、つながりのきっかけとなる、「ハブ(拠点)」となることも「暮らしの保健室」の役割だと考えています。

「手当て」という言葉がありますが、病を癒すには、医療だけではなく、痛いところに手を当ててくれるような、人のぬくもりも重要です。暮らしの保健室では、「普通」の医療、医術による治療ということではなく、「手当て」のようなぬくもりを地域に取り戻していくお手伝いをしています。「自分の暮らし」を支えるものは、行政や、「地域の誰か」が作ってくれるものではなく、行政も地域も、そして近所の人も自分も、みんなが一体となって、協力し合ってできるものであり、それが「地域包括ケアシステム」なのです。

〔こみねこハウス〕



写真 2

2、地域との連携

毎月の活動のほか、2017年11月には地域(若松区9で長年開催されている地域ケア会議から招聘を受け、活動内容についての報告会を行った。(写真3)

同じく11月には、地域の公民館で開催される地域文化祭に出展させていただき、来場者の方々の健康相談にも応じ、その後保健室にお立ち寄りいただくように、無料コーヒーチケットなども配布し地域の方々との交流を深めることができた。地域の自治会との連携ができ、自治会への入会もさせていただき、毎月の案内のチラシは、回覧板と一緒にいただけるようになるなど、地域の理解も徐々に進んできている。



(写真4)

また、2017年11月には、北九州緩和ケアネットワーク(任意団体)主催の北九州在宅ホスピスフェスタにもポスター展示で参加し、多くの来場所の方々から質問を受けるなど、市民の方々の関心の高さを身近に感じた。(写真4)

その他、広報活動として、西日本新聞から取材を受け地方版の紙面に大きく記事が掲載された。(写真5)

(写真5)

また、コミュニティFMラジオ放送局 Air Station Hibiki 番組での生放送にスタッフ数名で出演するなど、広報活動のすそ野を広げることができた。



3、地域に向けた勉強会の開催

(写真6)



年間に3回の勉強会を開催した。

2018年1月に開催予定であった映画「ケアニン」の自主映画会に向けて、施設での看取り、救急搬送、など今日的課題をテーマにした勉強会を開催し、それぞれ50名近くの参加者でグループワークも交えた有意義な勉強会となった。

3回目は、人生の最終段階における意思決定支援のガイドラインが改訂されたことを受けて、ACPについて、臨床倫理からひも解くと題し、琉球大学病院の金城先生をお招きして勉強会を開催し、多くの参加者とともに改めて倫理とは何かを考える良い機会となった。(写真6)

4、相談内容

年間を通して活動してきたが、保健室における活動は月に2回と少ないこともあり、開室日にタイムリーに相談に来られるケースはほとんどなく、また継続してフォローすることにも限界があるため、相談事例としては年間を通して10件足らずと、保健室としての目的は十分に果たせなかった。

相談内容については、慢性疼痛に悩む方の訴え、遠距離での介護相談、最近伴侶を亡くされた方の引きこもりが気になるというご近所からのご相談、複数の内服薬が気になるというご相談などがあり、その内ご近所の方が気になるという方を保健室開室日にお迎えに行き、昼食をご一緒するなどして久しぶりに外出できた事例もあり、気になる人を連れ出せる場所として活用していただけたことは良い結果であると言えるであろう。

その他、ご本人の相談ではないが、奥様を亡くされた独居の男性(80代)が、奥様の遺品を片付けているが処分するところがなくて困っているという連絡を受け、一緒に片付けながらフリーマーケットに出品するお手伝いをする、またその方が元大工の棟梁だったということで、保健室の玄関に靴を履くための腰替えを作っていただくなどして久しぶりに腕を振るっていただくことができ、喜んでいただくなど個別な対応ではあるが、いきがいの場としても役立つことができたのではないかと思うところである。

相談事は、自分自身でも気づいていないことも多いが、ご近所が気にして声をかけてくださる地域の良さもこの一年を通して感じることはできたことは、大きな収穫と言えるだろう。

5、1年を通しての感想

一昨年にソシオファンズ北九州(任意団体)の支援を受け、ビジョンミッションを考えながら走り出し、その手を離れて自主運営をし始めた一年間であった。ボランティア活動としての位置付けを確認しつつ、無理せずできること、しかし責任をもって継続することを必死に守り続けた一年であったと思う。

参加者それぞれの自主的な行動に支えられているが、仕事を持ちながらの運営は厳しい面もあり、メンバーが固定されてくるとそこから先に進むことが難しい局面も感じている。

次年度には、持続可能な運営に向けて人的要素と、経済的な要素を確保するための具体的なアクションが必要だと感じる。

しかし活動を改めて振り返るとき、何よりこのような活動を志望する専門職の人たちの思いによってこの活動が支えられているということを再認識した。それは言うまでもなく、地域に出ていく、専門職の鎧を脱ぐということを実現したい思いが多くあるということである。そのことがどのような活動になるのか思考し続けながら、次年度の活動につなげていきたいと思うところである。

※本事業は公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成によるものである。